

# F. V. Dickins 訳『仮名手本忠臣蔵』の成立と1880年版の改訂

——Japan Weekly Mail 誌上の論争を踏まえて——

川内有子 (立命館大学大学院文学研究科)

E-mail It015072@ed.ritsumei.ac.jp

## 要旨

1875年に初版が出版されたF. V. ディキンズによる英訳『仮名手本忠臣蔵』は、1971年にドナルド・キーンによる新しい英訳が発表されるまで英語圏における『仮名手本忠臣蔵』のテキストとして定着した。本稿では、初版から1880年版への改訂について、初版をめぐる*Japan Weekly Mail*の書評者とディキンズの間に起った議論をふまえて改めて分析することによって、ディキンズの翻訳に対する“学術的な翻訳”という評価をより具体的な形で捉えることを試みたい。

## abstract

F. V. Dickins's *Chushingura: or the Loyal League: a Japanese Romance*, published in 1875, had stood as a principal standard English text about *Kanadehon Chushingura* until 1971 when the new translation by Donald Keene was published.

This paper aims to elucidate the contemporary connotative sense of “academic translation” which Dickins's translation have been placed in, introducing the argument between a reviewer of *Japan Weekly Mail* and Dickins about the first edition of the translation in 1876 and reexamining the revision Dickins placed for 3<sup>rd</sup> edition which was published in 1880.

## はじめに

フレデリック・ヴィクター・ディキンズ (Frederick Victor Dickins, 1838-1915) は、アーネスト・サトウ (Ernest Satow) やバジル・ホール・チェンバレン (Basil Hall Chamberlain) らと並ぶ初期の日本学者の一人で、日本文学を西洋社会へ本格的に紹介した第一人者として知られている。彼は、1865年に『百人一首』の英訳を雑誌上で発表したあと、1875年に横浜で『仮名手本忠臣蔵』の英訳を出版した (以下、これを初版と呼ぶ)<sup>1)</sup>。この英訳は『仮名手本忠臣蔵』の初めての英語の全文訳で、イギリスにもたらされた赤穂浪人の討ち入り事件に関する著作としては、1871年にロンドンで

出版され西洋人読者に広く読まれたアルジャーノン・ミットフォード (A. B. Mitford) の *Tales of Old Japan* 所収の “The Forty-seven Ronins” に続くものである。初版出版の翌年にはほとんど変更は加えられないままニューヨークのプットナム社 (Putnum) から第2版が出され、それから大きな改訂を経て、1880年にはロンドンのアレン&アンウィン社 (Allen & Unwin) から第3版、1892年には日本でも新しい版が出版された<sup>2)</sup>。その後も廉価版など版を重ね、1971年にドナルド・キーン (Donald Keene) による新しい英訳が発表されるまで、英語圏における『仮名手本忠臣蔵』のテキストとして定着した。

この英訳に関しては、日本学者としてのディキンズの伝記的研究に先鞭をつけた川村ハツエ氏<sup>3)</sup>の論考があり、岩上はる子氏<sup>4)</sup>によって訳文の詳細な

検討がなされている。岩上氏は、ディキンズの全集<sup>5)</sup>に決定稿として採用された1880年版をテキストとして用いて、ミットフォードとの共時的な比較や、初版と1880年版の訳文の比較、キーンの訳文との通時的な比較などを行い、ディキンズの翻訳の特徴は語り物の調子も含め可能な限り原典に近づけようと試みる姿勢にあると結論付けている。また、ディキンズの翻訳が『百人一首』の頃から貫く、翻訳に用いたテキストを明らかにし巻末に原文テキストを数ページ掲出するというスタイルは、川村氏、岩上氏によって研究書のような体裁であると形容された<sup>6)</sup>。本稿では、初版から1880年版への改訂について、討ち入り事件に関する西洋での記述を通時的に論じたアーロン・コーエン (Aaron Cohen) 氏<sup>7)</sup>が報告した、初版をめぐる*Japan Weekly Mail*の書評者とディキンズの間に行った議論をふまえて改めて分析することによって、ディキンズの翻訳に対する「学術的な翻訳」という評価をより具体的に捉えることを試みたい。

翻訳者であるディキンズは、1838年にマンチェスターに生まれ、パリのリセ・ボナパルト (Lycée Bouonaparte) を卒業したのち、ロンドン大学に入学し1859年に医師の免許を取得した。1862年からはイギリス海軍所属の軍医として東アジアに配属され、1863年に初来日、1864年からは艦を離れ江戸のイギリス公使館の医官として日本に滞在した。1866年にはこの職を辞し、一旦イギリスへと帰国した。この最初の来日から帰国までの短期間にディキンズは日本語を目覚ましく習得しており、1865年にはロンドン大学の中国語学教授ジェームス・サマーズ主宰の東アジアに関する学術誌 *Repository* に、ディキンズの訳業の第一歩として知られる『百人一首』の英訳を発表している。イギリス帰国中に弁護士資格を取得したディキンズは1870年に再来日し、体調を理由に再び帰国する1878年まで、日本で弁護士として活動する傍ら、日本研究に勤しんだ。本稿でとりあげる『仮名手本忠臣蔵』の英訳が、横浜で発行された写真入り英文雑誌 *Far East* に発表されたのもこの時期である。ディキンズは、イギリス帰国後、弁護士としてのキャリアを模索したのちロンドン大学事務局に勤務し、1896年から1901年まで事務局長のポストにあった<sup>8)</sup>。この時期に結ばれた

博物学者・南方熊楠との親交はディキンズの日本研究に大いに刺激を与えた<sup>9)</sup>。英訳『仮名手本忠臣蔵』の1880年版に向けた改訂の時期について、岩上氏は、ディキンズから南方熊楠へ宛てた手紙<sup>10)</sup>に基づき、1878年にイギリスに帰国して以降になされたものと措定している。

本稿の目的は、最初期の日本文学の翻訳を代表する重要な一例であるディキンズの翻訳の検討を通して、当時の翻訳が成立した環境についてより具体的な像を示すことである。本稿では、まず、初版をめぐる書評者とディキンズとの議論をたどり書評で批判された箇所が1880年版ではどう扱われているのかを検証し、1880年版で行われた改訂の様子を明らかにする。加えて、書評でも触れられず改訂でも手が付けられていない、2か所の削除された描写に言及することにより、当時の学術的な翻訳のあり様を示す一例として当該翻訳を位置づける。

## 初版をめぐる*Japan Weekly Mail*における議論と改訂

本節では、*Japan Weekly Mail*の書評欄に掲載されたディキンズ訳の初版に対する批判とそれに対するディキンズの反論を1880年版に向けた改訂と対照させることで、詳細が分かっていないディキンズの改訂のプロセスの一部を明らかにする。*Japan Gazette*の編集人であったジョン・レディ・ブラック (John Reddie Black) が創始した雑誌 *Far East* での、1874年から1875年にかけての連載を経て横浜で出版されたディキンズの初版は、必ずしも高い評価を受けたわけではなかった。横浜で発行されていた週刊誌 *Japan Weekly Mail*の1876年11月19日号には、ディキンズの訳文は意識が過剰だとして私訳を並べ、多くの誤りを指摘した激しい酷評が掲載された。そして、1週間後の翌号にはディキンズ本人およびディキンズの翻訳を擁護する人物から書評者に向けた反論、および貨幣専門家から大判小判の価値に関する注の誤りを指摘する意見が掲載され、論争の様相を呈した<sup>11)</sup>ことが、コーエン氏により報告されている。書評者の指摘の内容とそれ

に対するディキンズの *Japan Weekly Mail* 誌上での反論および1880年版での該当箇所改訂については、表1としてまとめ文末に付し、本節では、必要に応じて表に付した番号を用いて言及する。

*Japan Weekly Mail* は、*Japan Herald*、*Japan Gazette* とともに、開国直後に創刊された、日本における三大英字新聞の1つで、1872年に創設されたばかりの日本アジア協会が1874年に協会自身で紀要の発刊を行うようになるまで講演内容や論文掲載の役割を担い、その後も1917年まで、研究成果や協会の情報を購読者たちに届けることで研究を支援した<sup>12)</sup>。そして、海外にいる購読者に向けて2週分をまとめたものが *Japan Mail* として送付されていた。書評掲載の時期が、初版が出されてから1年後の1876年であったことは、*Japan Mail* を通した海外の読者の存在とニューヨークで1876年版が出されたこととが関係しているのだろうと思われる。ディキンズの翻訳を痛烈に批判した書評者は、その文面から日本語や日本文学の学識があり日本アジア協会と近い人物であったことは想像がつくものの、19世紀当時、寄稿者や執筆者の匿名性が容認されていたために記名がなく<sup>13)</sup>、特定は難しい。

書評者は、まず、ディキンズがこの度新しく発表した翻訳の価値を否定するところから始める。それも、ヨーロッパ人日本研究者たちが注意を払う江戸時代は「日本史の暗黒時代—日本文学における退廃期 (the Dark Age of Japanese History—an age of decadence in the literature, of decay in the language, and of degeneracy in the national customs and character)<sup>14)</sup>」であるけれども、時代的に近いこの時期の文学研究は歓迎されるべきものである、という前振りを付けたうえでディキンズ訳を否定しているため、書評者の批判は一層辛辣に響く。そして、この冒頭から一貫して、訳文から注にいたるまで、ディキンズの誤りを細かく指摘した。反駁を発表したディキンズは、「書評者は私の翻訳を注意深く読んだようには全く見受けられない (indeed he does not appear to me to have read it with any attention.)<sup>15)</sup>」と冒頭から書評に対して否定的で、明らかな語義や事実に関する誤りの場合は認めるものの、基本的には指摘は当たらないとする姿勢を貫いている。

一方、書評で指摘された箇所が1880年版に向けてどのように改訂されたのかについて注目してみると、ディキンズの処置は、a. 反駁の記事上でも誤りを認め改訂において修正を加える (③大序の冒頭の訳文、⑦、⑪)、b. 反駁の記事上では誤りではないとしたが改訂において修正を加える (②、③の脚注、④、⑨)、c. 反駁の記事上での言及は大きく改訂において修正を加える (⑤、⑥、⑧、⑩、⑫)、のように大きく3種類に分けることができる。つまり、書評への最初の対応として発表されたディキンズの反駁の内容に関わらず、①で指摘されている翻訳作品の選定という根本的な問題を例外として、改訂の際に修正や補足などの何らかの対応がとられていることがわかる。特に、1880年版では、③について大序の冒頭だけを「原作者の序文 (author's preface)」として別に訳出した経緯を新たに脚注を付して説明し<sup>16)</sup>、さらに⑥について、鳥の鳴き声と「かわい (kahwhy)」との音声上の類似という根拠を示して脚注における掛詞の説明を充実させており<sup>17)</sup>、いずれも書評者の指摘に対応して補足説明を加えたような印象を受ける。改訂がこの論争をどれほど踏まえたものであったかディキンズ自身の発言は確認できないが、指摘された箇所の改訂における取り扱いかからは、ほとんどの指摘を退け、自身の翻訳を全面的に擁護したディキンズの態度が議論上の修辭に過ぎず、誌面上での対応とは裏腹に書評者の指摘が実際には受け入れられ、改訂を行う際に参考にされた可能性を指摘することができる。

書評に対する反駁の中で、ディキンズは、初版発表以降に自身で気づいたり、*Japan Weekly Mail* の書評者以外から「より親切」な形で指摘されたことで、誤りや加筆すべき点は指摘されなくとも了解しており、次の版ではこれらの誤りは修正されるだろうと述べている<sup>18)</sup>。こうした記述からは、1876年時点ですでに1880年版の構想があったこと、さらに、他の専門家からの批評を取り入れるディキンズの開かれた態度、つまり、改訂の内容にディキンズ個人の研究の進展だけでなく、ディキンズを取り囲む日本学研究のコミュニティが研究成果の提供よりも直接的な指摘という形で影響を及ぼしていたことが浮かび上がってくる。



## 維持された意識

こうした改訂を経た1880年版はロンドンで出版され、デイキンズ自身も「この版は、全体として、前の版よりも原典に忠実になっている (the present version is, on the whole, a closer rendering of the text now followed than the former one.)<sup>19)</sup>」と序文で自信をにじませたように、訳文の原典への忠実性について概ね高い評価を受けていた。例えば、夏目漱石を教え子に持つことでも知られるスコットランド人日本史学者ジェームス・マードック (James Murdoch) は、「非常に学術的な完訳 (a very scholarly and complete translation)」と評価している<sup>20)</sup>。学術的な翻訳という評価や、川村氏や岩上氏が注目した研究書のような体裁は、デイキンズの翻訳が原文に忠実なものだったという印象を強く持たせる。しかし、一方で、デイキンズ自身は、翻訳に際して意識を行ったことを初版においても1880年版においても明言している。初版の序文では、「いくつかの場合には、訳さずそのままにしておいたり、原典の一部を手短かに訳したほうが良い場合もあった (in some instances it has been found advisable to leave untranslated, or to translate shortly, portions of the original.)<sup>21)</sup>」と、特に意識を行う判断基準を示していないが、1880年版では、「イギリス人読者たちの切なる要求 (the exigencies of English readers)<sup>22)</sup>」に応える必要があると判断した場合、という基準を示している。本節でとりあげる、初版、1880年版の両方に共通する描写の削除2点についても、デイキンズの定義に基づくなら、イギリス人読者への配慮の結果であるとひとまず捉えることができる。なお、これらの削除に関して、明らかに原典に忠実でないにも関わらず、管見の限りにおいて書評者とデイキンズとの議論やその他の書評においても言及された例はない。以下に浄瑠璃本校訂本文<sup>23)</sup>、初版、1880年版、参考として1971年に出版されたドナルド・キーン訳<sup>24)</sup>を引用し、削除された2箇所について見ていきたい。

1つ目は、二段目の終わりに主君である若狭之助が師直を切り付け窮地に陥るのを未然に防ごうと加古川本蔵が馬を駆って発とうとしている場面で、妻

の戸無瀬や娘の小浪が本蔵の馬に取り付いて止めようとするところである。

校訂本文：シャ面倒など鐙の端。一当テはっしと当テられて。うんと斗りにのっけに反を見向キもせず (pp. 212-213)

初版：“You are too importunate. Delay not (to the servants) but follow me.” (p. 15)

1880年版：“You are too importunate,” repeated Honzo, sharply. “Delay not (to the servants), but follow me.” (p. 14)

キーン訳：HONZO: Blasted nuisance!

NARRATOR: He aims a kick with the point of his stirrup. It strikes squarely, and the women, moaning, topple over. He does not so much as look at them. (p. 46)

初版でも改訂後の1880年版でも、本蔵が鉄製の馬具で2人を足蹴にした上、悲鳴をあげて倒れる2人を見向きもしなかったことを訳文では削除し、ただ、主君のためを思って部下を引き連れ急いで出立したことだけを訳出していることが確認できる。

2つ目の例は、祇園を舞台とした七段目の1つの特徴ともいえる、婀娜めいた戯言の訳である。塩冶の奥方である顔世御前からの密書を読んでいた由良之助は、2階から延べ鏡で手紙を盗み見する遊女 (おかる) を見つけ、秘密を知ったおかるを始末するためにまずは階下へ降ろそうとする。なかなか降りてこないおかるに由良之助が催促し、おかるがはしがが揺れるので舟に乗っているようで怖いとためらうのをうけて、舟の縁語を用いておかるの局部が梯子の下から覗けるぞと、おかるの羞恥心に訴えて降りてこさせようとする。結局最後は由良之助がためらうおかるを「やかましい生娘かなんぞのやうに。逆縁ながら<sup>25)</sup>」と言いながら抱えて下ろしてしまう。少々長いが、原文と並べて引用することでデイキンズがどのようにこの性的なジョークの部分を省略したのかがより明確にわかるため、下に引用したい ([ ]はおかるのセリフ。[ ], 下線は引用者による)。

校訂本文：大事な／＼。あぶないこはいは

昔の事。三間づまたげても。赤かうやくもいらぬ年シはい。 [あほういはんすな。舟にのつた様でこはいわいな。] 道理で舟玉様が見へる。 [ヲのぞかんすないな。] 洞庭の秋の月様をおがみ奉るじゃ。<sup>26)</sup> (p. 537)

初版: "There is no danger," exclaimed Yuranoske, "none whatever ; you need not fear, a strapping girl like you." "Don't be so silly, it is like being in a boat, I know I shall tumble." The girl, however, got upon the ladder, and began to descend, but very reluctantly. "Quick, quick," cried Yuraoske, "or I will pull you down." (p. 93)

1880年版: 初版から変更なし (p. 84)

キーン訳: YURANOSUKE: Don't worry. You're way past the age for feeling afraid or in danger. You could come down three rungs at a time and still not open any new wounds.

OKARU: Don't be silly. I'm afraid. It feels like I'm on a boat.

YURANOSUKE: Of course it does. I can see your little boat god from here.

OKARU: Ohh-you mustn't peep!

YURANOSUKE: I'm admiring the autumn moon over Lake T'ung-t'ing. (p. 117)

原文引用部の下線を施した部分は、明らかに性的な意味を含んだ戯言で、英文に施した下線部はそれに対応する部分である。ディキンズは、この場面を大幅に省略しており、3つの文のうち2つは訳文で完全に削除されていることがわかる。はじめの「赤かうやくもいらぬ年シはい」のみ「お前のように体の大きな女の子なら怖がる必要なんかない (you need not fear, a strapping girl like you)」と言葉を置き換えて訳出している。発育良好な若い女性を意味する<sup>27)</sup> “strapping” という言葉選びによって、原文のおかるが生娘ではないことを揶揄する性的な意味合いは大幅に薄められている。

この2つの描写の削除について、単なる誤訳、または、原文が理解できなかったための省略であったと安易に結論付けることは避けたい。なぜなら、

1865年に『百人一首』の英訳を行ったことが示すようにディキンズの日本語能力および専門知識は高く、さらに、ディキンズが熊楠へ送った手紙で「唯一、助力を得られたのは『忠臣蔵』くらいでした (The only translation I was assisted in was the Chushingura 忠臣)<sup>28)</sup>」と述べているように、補助者がいたと考えられるからである。また、*Japan Weekly Mail* の書評者は、ディキンズの翻訳を批判する中で、ディキンズの原文理解が不十分であることを揶揄する文脈において、ディキンズより有能な学者の助力を得ることを勧めており<sup>29)</sup>、補助者をつけることが当時の翻訳を行う標準的な環境であったことがわかる。意識について話を戻すと、削除された2つの場面に共通しているのは、いずれも省略されても話の筋には大きな影響を与えない描写で、なおかつ、前者が身分ある武士からの妻子への暴力、後者が物語の主人公から若い女性への性的なきわどい発言という、公序良俗の上で好まれない行動を描写している点であった。

アイルランドの英雄譚の初期の英訳の問題を検討したマリア・ティモツコ (Maria Tymozko) は、ヴィクトリア朝時代になされた英訳は典拠を明らかにして詳細な注を備えたどんなに学術的なものであっても、当時のイギリスのモラルからの影響を免れることがなかったことを例証している<sup>30)</sup>。本稿でとりあげた2つの例のうち七段目の由良之助の性的な戯言については、明らかにきわどい発言で、中等教育から高等教育までをヴィクトリア朝期のイギリスで終えた井上十吉が1911年に『仮名手本忠臣蔵』の翻訳に取り組んだ際にも省略されていた<sup>31)</sup>。一方、二段目の本蔵の妻子への仕打ちについては、井上十吉訳では原文に忠実に訳されており、この点についてディキンズと井上には微妙な判断基準の違いがあったようである<sup>32)</sup>。しかし、イギリスで発表されたディキンズの翻訳に対する書評を見てみると、家族や社会的成功を犠牲にしてまで主君に尽くす古武士然とした浪人たちの姿がイギリス人読者たちの懐古趣味を刺激して称賛を集めた一方<sup>33)</sup>、浪人たちの女性への接し方がイギリス人の丁重さを重んじる流儀と似通っていることに注目したものもあり<sup>34)</sup>、妻子を足蹴にして振り向きもせず去る様子をディキンズが訳出していた場合にこうした読者たちに受け入

られなかった可能性はある。

また、仮にこの意識が行われていなかった場合、読者の心象だけでなく、日本文化の評価も損なっていたと思われる。それは、ディキンズが『仮名手本忠臣蔵』の翻訳に期待した役割と関わってくる。ディキンズは、先に言及した *Japan Weekly Mail* の書評者との論争において、『仮名手本忠臣蔵』の文学的価値の低さが翻訳される作品としてふさわしくないという点が問題になった際（文末の表1①参照）、「日本文学の一例の単なる再現の類など思いもよらぬこと (Nothing was further from my thoughts than any sort of mere reproduction of a specimen of Japanese literature)<sup>35)</sup>」とし、あくまで江戸時代の日本人の国民性や物珍しい文化の標本として訳出したのだと答えている。このような考え方は当時珍しいものではなく、ディキンズと同時代のイギリス民俗学者ジョセフ・ジェイコブス (Joseph Jacobs) は「古き日の思想や慣習の痕跡や人々の心の動きについて、より完全な知識を得ること (to gain fuller knowledge of the workings of the popular mind as well as traces of archaic modes of thought and custom)<sup>36)</sup>」を目的としてイギリス民話集を編集したと述べている。ディキンズの『仮名手本忠臣蔵』の位置づけは、文学作品というよりも、むしろ文化を評価する基準として見なされたフォークテールに近いところにあった。

## おわりに

本稿では、具体例に即して、ディキンズの翻訳が当時のイギリス社会、そして当時の日本学とどのように関係し、影響を受けたのかを論じた。本稿で行ったディキンズの翻訳の検討からは、出版当時から学術的な翻訳として評価されてきた英訳『仮名手本忠臣蔵』が、ヴィクトリア朝イギリス社会という社会・文化的背景から、そしてディキンズの周囲の日本学研究者や書評者という専門家のコミュニティから、間接的にも直接的にも影響を受けて成立し、原典の忠実な再現が必ずしも最優先して目指されたわけではなかったことを確認した。特に、書評者

の批判と改訂に関する考察からは、当時の日本文学翻訳が行われた環境について、翻訳者と専門家コミュニティとの距離が想像以上に近いものであったことを実証できたと考える。

## 〔注釈〕

- 1) Dickins, F. V., ([1875] 3rd ed. 1880), *Chushingura: or the Loyal League: a Japanese Romance*, London: Allen & Unwin.
- 2) 丸善株式会社編『丸善百年史：日本近代化のあゆみと共に（上巻）』（丸善、1980年、pp. 381-388）によれば、1880年版が当時の丸屋を通して輸入され、日本国内で普及し、旧制中学の教科書もしくは副読本として読まれ、丸屋が版元となった版も出回ったとあり、1892年版はこれにあたるものと考えられる。1892年版では、1880年版に含まれていた『仮名手本忠臣蔵』の作者を近松門左衛門とするなどの明らかな事実誤認を訂正しているが、これらの誤りは1912年版では訂正されていない。サトウ宛てのディキンズの書簡で1912年版の出版については言及がある一方、1892年版については何の言及も確認できないことから、1892年版の改訂にディキンズは関わっておらず、丸屋側で独自に行ったものと思われる。
- 3) 川村ハツエ (1997) 「第三章 『仮名手本忠臣蔵』の英訳」『F・V・ディキンズ—日本文学英訳の先駆者—』七月堂、pp. 58-82
- 4) 岩上はる子 (2015) 「F. V. ディキンズと日本文学—『仮名手本忠臣蔵』の翻訳について—」『英学史研究』48, pp. 1-16
- 5) Dickins, F. V., (1999), *Collected works of Frederick Victor Dickins: v. 2. Translations: 1*, Bristol: Ganesha.
- 6) 依拠したテキストへの言及の有無が19世紀末のイギリスにおける商業用の翻訳と学術的な翻訳とを区別する重要な指標であったことは、同時期のアイルランド文学の英訳について論じたマリア・ティモツコ (Maria Tymoczko) からも指摘がある。(Tymoczko, M., (1999), "The Two Traditions of Early Irish Literature", *Translation in a Postcolonial Context*, Manchester: St. Jerome, pp. 131-132)
- 7) Cohen, Aaron M., (2008), "The Horizontal Chushingura: Western Translations and Adaptations Prior to World War II", *Revenge Drama in European Renaissance and Japanese Theatre*, Edited by Kevin J. Wetmore, Jr. New York: Palgrave Macmillan, pp. 153-185
- 8) Kornicki, Peter. F., (2004), *Oxford Dictionary of National Biography*, Edited by H.C.G. Matthew and Brian Harrison, Oxford: Oxford University



- Press, pp. 86-87
- 9) ディキンズと熊楠との親交については、岩上はる子氏 (2017) 『『竹取物語』はいかに英訳されたか』(『英学史研究』50, pp. 3-22) に詳しい。
  - 10) 1898年7月13日付、南方熊楠宛の手紙を指す。(岩上はる子、ピーター・コーニッキ編『F・V・ディキンズ書簡英文翻刻・邦訳集：アーネスト・サトウ、南方熊楠(他)宛』、エディション・シナプス、2011年、pp.228-229〈岩上氏による日本語訳はp.275〉)
  - 11) *Japan Weekly Mail*の1876年11月29日号に書評が掲載され、翌12月6日号にディキンズからの反論が掲載された。本稿では、大英図書館が所蔵する、*Japan Weekly Mail*の2号分の記事をまとめた12月11日発行の*Japan Mail*を参照し、引用した。よって本稿で掲げる書評とディキンズの反論のページ数は、*Japan Mail*のものである。
  - 12) *Japan Weekly Mail*と日本アジア協会との密接な関係については、楠家重敏(1995)「日本アジア協会の知的波紋」(『杏林大学外国語学部紀要』7, pp. 123-142) に詳しい。
  - 13) Houghton, Walter E., (1959), "British Periodicals of the Victorian Age: Bibliographies and Indexes", *Library Trends*, 7(4), pp. 554-65
  - 14) [unknown], (1876), "Review", *Japan Mail* (December 11, 1876), p. 708
  - 15) Dickins, F. V., "The Chushingura: To the Editor of the 'Japan Weekly Mail'", *Japan Mail* (December 11, 1876), p. 715
  - 16) Dickins, F. V., (3rd ed. 1880), *Chushingura: or the Loyal League: a Japanese Romance*, London: Allen& Unwin, p. xv
  - 17) 同上、p. 32
  - 18) Dickins, F. V., (1876) "The Chushingura: To the Editor of the 'Japan Weekly Mail'", *Japan Mail* (December 11, 1876), p. 715
  - 19) Dickins, F. V., (3rd ed. 1880), *Chushingura: or the Loyal League: a Japanese Romance*, London: Allen& Unwin, p. xiii
  - 20) James M., (1926), *A History of Japan*, London: Kegan Paul, Trench, Trubner& Co, p. 235
  - 21) Dickins, F. V., (1876), *Chushingura: or the Loyal League: a Japanese Romance*, Yokohama, p. iii
  - 22) Dickins, F. V., (3rd ed. 1880), *Chushingura: or the Loyal League: a Japanese Romance*, London: Allen& Unwin, p. xiii
  - 23) ディキンズが翻訳に用いたと思われる書き込み入りの旧蔵書が1999年時点でロンドンのディキンズの孫宅に存在したことが牧田健史氏の研究メモから分かっている(2017年10月28日閲覧:「ディキンズの孫がロンドンに健在」<http://www.aikis.or.jp/~kumagusu/articles/makita15.html>)。1880年版の巻末注には
- ディキンズが用いたテキストについての説明があり、それによれば、版元が「大阪船町にある加島屋清助 (partly at Ohosaka, by one Seisuke, at the sign of Kajima, in the Funa-machi)」のものと「江戸日本橋瀬戸物町 (partly at Yedo, at a house in the Seto-mono-cho)」のものを用い、1880年版ではまた別のテキストも用いているとある (Dickins, F. V., [3rd ed. 1880], *Chushingura: the Loyal League: a Japanese Romance*, London: Allen& Unwin, appendix p. 148)。神津武男『浄瑠璃本史研究：近松・義太夫から昭和の文楽まで』(2009年、八木書店)にまとめられた諸本の奥付の表によると、ディキンズが用いたテキストのうち版元が「加島屋清助」とあるものについては、七行本のうち大阪三版本もしくは四版本にあたると思われる。本稿では、同じく七行本を底本とした藤野義雄『仮名手本忠臣蔵：解釈と研究』(1974-1975年、桜楓社)を校訂本文として使用した。
- 24) Keene, D., (1971), *Chushingura: the Treasury of Loyal Retainers: a Puppet Play*, New York: Columbia University Press.
  - 25) ディキンズの翻訳では、この箇所由良之助のセリフは訳さず、ただ抱きかかえた動作だけを訳出する。
  - 26) 藤野義雄校注『仮名手本忠臣蔵：解釈と研究(中)』(pp. 546-547)によれば、「赤かうやくもいらぬ年シはい」とは「処女でもあるまいし、大きくまたいでもその為に裂傷を生じて赤こう薬を便わねばならない」年頃ではない、の意。「舟玉様」とは本来船舶の守り神のことをいうが、この場合は「お軽が『舟にのった様で』と言ったので、『舟玉様』と女の陰部をしゃれて言った」もの。さらに「洞庭の秋の月」も本来は瀟湘八景の1つである洞庭秋月を指すが、ここでは「舟玉様」と同様に女性の陰部を指す。
  - 27) Pearsall, J., Hanks, P., Soanes, C., Stevenson, A., (2005), *Oxford Dictionary of English* [2nd ed. rev], Oxford: Oxford University Press, p. 850
  - 28) 1898年7月13日付、南方熊楠宛の手紙を指す。(岩上はる子、ピーター・コーニッキ編『F・V・ディキンズ書簡英文翻刻・邦訳集：アーネスト・サトウ、南方熊楠(他)宛』、エディション・シナプス、2011年、pp. 228-229〈岩上氏による日本語訳はp.275〉)
  - 29) [unknown], "Review", *Japan Mail* (December 11, 1876), p. 708
  - 30) Tymoczko, M., (1999), "The Two Traditions of Translating Early Irish Literature", *Translation in a Postcolonial Context*, Manchester: St. Jerome, 1999, pp. 122-145
  - 31) 井上訳では依拠したテキストについて言及がなく、注も一般的な内容に留まっているため、ディキンズ訳とは対照的に商業的な翻訳であったと見なすことができる。
  - 32) 井上訳では、「本蔵が妻子を鎧で蹴ると、彼らは気

を失い、仰向けに倒れていく。本蔵はそれを見向きもせず、ただ家来たちについてくるようにとだけ言い、馬を駆り、視界から遠ざかっていく。(He kicks them both with his stirrups, and fainting, they fall on their backs. He does not look at them; but telling his servants to follow, he urges his horse and gallops out of sight.)」(p. 22)となっている。

- 33) Stevenson, R. L., (1883), "Byways of Book Illustration: Two Japanese Romances", *Magazine*

*of Art*, 6. pp. 8-15.

- 34) Wedderburn, D., (1879), "The Loyal League: A Japanese Romance", *Fortnightly Review*, 25(146), pp. 273-289
- 35) Dickins, F. V., "The Chushingura: To the Editor of the "Japan Weekly Mail"", *Japan Mail* (December 11, 1876), p. 715
- 36) Joseph, J., (1898 [1st ed. 1890]). *English Fairy Tales*, London: David Nutt, p. xi

表1

| 番号 | Japan Weekly Mail 書評者の指摘  | ディキンズの反論  | 1880年版での改訂  |
|----|---|---|---|
| ①  | 『仮名手本忠臣蔵』は文学的価値が低く、残酷で血なまぐさい封建制度下の日本に関する資料というくらいの価値しかない。  | 英語圏の読者に、再び現れるとは思えない旧時代の日本の社会状況を伝える材料として、広く知られた作品を翻訳に選択した。   |   |
| ②  | 原典は芝居であるにもかかわらず「一種の演劇的な散文のロマンス (a sort of dramatic prose romance)」として位置づけ、一方で翻訳自体は戯曲の体裁でなされている。『仮名手本忠臣蔵』は散文ではなく不規則な韻文である。   | 『仮名手本忠臣蔵』は文学的な形式としては対話で構成された芝居だが、浄瑠璃は多様な性格を持ち、流浪の吟遊詩人に歌われることも多く、西洋のパラッドに相当する。八段目以外は韻文調とは程遠い。  | 初版：a sort of dramatic prose romance (p. appendix 3) → 1880年版：a sort of dramatic part-prose part-metrical romance (p. 148)   |
| ③  | 大序はいわゆる序文のことではないにも関わらず、大序の冒頭の数行を「著者の序文 (author's preface)」として訳出し、なおかつ誤訳が多くある。(書評者の私訳を初版訳文と並記：国が平和な時は、良い侍の忠義や武勇は秘められるが、夜の混乱の中では目に見えるようになる (Thus when a country is at peace, the loyalty and valour of good samurai are concealed, lie the stars which are unseen in the day time, but become visible in the confusion of night.) | 「著者の序文」としてBook Iとは別に訳出した大序の数行は、調子の上で他の部分と異なっているため、翻訳で施した処置は間違っていない。むしろ、草稿段階でドラマチックに訳出した“Prologue”のままにしていたほうがふさわしかったかもしれない。大序の内容の誤訳については認める。 | 初版：… the confusion of a country where the loyal and brave deeds of worthy samurai remain unnoticed is like that of a dark night, when not so much as a star-twinkle is to be seen… (p. iv) 脚注なし → 1880年版：…and so, in piping times of peace, the loyalty and bravery of valiant samurahi remain unnoticed, like as the light of the stars, unseen in the day-time, becomes visible only in the darkness and confusion of night … (p. xv) 脚注：In the text the whole of the First Book is dignified by the name of "daijo" or "preface"; but the introductory sentence here translated alone deserves that title, the rest of the book being, in reality, a portion of the narrative. |
| ④  | 将軍に対して "Imperial" "Majesty" といった皇室や王室に対して用いる言葉を選ぶような低レベルのミスをしている。   | 足利将軍家に対して "Imperial" や "Majesty" という言葉を用いることは、14世紀当時足利家が有していた権威を考えると誤りではない。   | 初版：足利将軍家に対しても帝に対しても "His Majesty"。 「御上使」の訳 "Imperial Commissioner" → 1880年版：将軍に対しては "His Highness"。 「御上使」は "Commissioner"。  |
| ⑤  | 「御馳走の役人」は「鎌倉を訪れる将軍の弟を歓迎する宴に参加するよう指名された役人たち (officers appointed to attend to the reception of the Shogun's brother on the occasion of his visit to Kamukura)」のことである。   |   | 初版：「在鎌倉の執事」は Prime Councillor under His Majesty the Shogun (p. 2)。「御馳走の役人」は gentlemen-in-waiting to His Highness (p. 13) → 1880年版：chief representative of the Shogun at the Eastern capital (p. 2), the duty of receiving guests (p. 11)。   |
| ⑥  | 三段目に登場する鳥の鳴き声に「日本人は、奇妙なことに、鳥の鳴き声に愛の調べを感じ取る (The Japanese, strangely enough as it appear to us, detect in the hoarse tones of the crow the note of love.)」と注が付されているが、それには『仮名手本忠臣蔵』本文中にある「かう」と「可愛い」との掛詞しか根拠がない。   |   | 1880年版：There is a sort of appropriateness in mentioning the crows here. The caw or croak of these birds is supposed to resemble in sound the repetition of the word Ka-wai (pronounced "kah why", "love.") (p. 32)  |



|   |  |   |  |
|---|--|---|--|
| ⑦ | 七段目に出てくる「くつわ」を「鍔 (stirrup)」と訳出している。                                      | 「くつわ」の訳は確かに誤りだった。                                     | 初版：stirrup→1880年版：bridle-ring  |
| ⑧ | 武士と町人との間に厳然とした身分の違いがあったことを説明する際に、「町人」の中に農民が含まれている。                       |   | 初版：the Chonin (lit. "street people"), or citizens, artisans, and peasants (p. 134)<br>→1880年版：同じ注から“peasant”だけを削除。   |
| ⑨ | 十一段目に出てくる「御免」の注について、「御免」の「免」は「許し (permission)」の意味であって「顔 (face)」の意味ではない。  | 「御免」の「免」が許可の意味を持つことは知っているが「面」の用法も何例か知っているため不適合とは思わない。 | 初版：Lit. "honourable face," "lending me your honourable countenance," i.e., "with your permission" →1880年版：i.e., "with your august permission" (p. 143)             |
| ⑩ | 吉田兼好について「二流のへぼ詩人 (a mediocre versifier)」としか紹介せず、より広く知られている『徒然草』に言及していない。 |   | 1880年版：He was also the author of a collection of essays on all sorts of subjects of very little intrinsic interest or value, known as the Tsure-dzure-gusa (p.159) |
| ⑪ | 巻末注において伴内を人の名前ではなく「衛兵の頭」と役職として解説している。                                    | 「伴内」を役職として訳出したのは誤りだが、文脈から誰かの名前を指していることは読者には明白だろう。     | 1880年版：この注は削除。   |
| ⑫ | 「うつうつ」を「眠ること、夢を見ること」と訳出している。   |   | 1880年版：この注は削除。   |